

# 追求は異なる角度、視点から ——ヘンリー・ヴォーン小考（六）——

森 田 孟

ヘンリー・ヴォーン (Henry Vaughan, 1621-95) の『火  
花散る燧石』*Silex Scintillans* (1650, 1655) には、同題の  
作品が二篇ずつ五組収録されている他、類似の標題を持つ  
ものが何組もある。同じタイトルの作品五組を、現れる順  
に便宜上一〜五にA、Bの記号を付して区別して示せば次  
のようになる。

- (一) 「死」— A [M・三九九—四〇〇]、B [M・五三三—三  
四]
- (二) 「最後の審判」— A [M・四〇二—三]、B [M・五三  
〇—三二]
- (三) 「オリヴァ山」— A [M・四一四—一五]、B [M・四  
七六]

- (四) 「懇願」— A [M・四八〇]、B [M・五〇〇—一]
- (五) 「イエス泣き賜う」— A [M・五〇二—三]、B [M・  
五〇三—五]

(一) Aは、既に本小考(三)「本誌第二〇一号、二一—二二ペー  
ジ」で一瞥したように、寝台に横たわった死体の中で  
「魂」と「肉体」が対話する形で、最後に「ヨブ記」の一  
節を持ち出してきて、〈死〉について瞑想を展開していた。  
死によって離ればなれになろうとしている「魂」と「肉  
体」とが再び合体することで、死の陰の国、闇そのものの  
ような闇、光が闇と同じである所にあっても、生存中の  
「人間」の〈太陽〉を沈ませないでおうと、「魂」が「肉

体」に呼びかけていた。

「再生」に始まったこの詩集の第一部の二番目に配された(一)Aだったが、(一)Bは、五年後に組み込まれた第二部の最後から十番目に現れる。A B A B Bと押韻する五行詩六連から成り、各行の音節数は六連共順に8 4 8 8 8の整然たる構成である。

## 死 Death [一]B

そなたが正にアベルの血<sup>(1)</sup>によつて初めて

悲しいことに 入り込んで以来

ほぼ六千年が経った今

尚 そなたの特権は有効だが

それでもそなたは誰にも理解されていない。

我らは易々とそなたに話しかけて名付けけるのだ

重荷を負ったものと、

そして誰もが 自らの貸借契約を軽んじる

まるでそれが〈春〉 終ったかのように

それで隠遁所と四阿とが 共に使用料無しなのだ。

そなたの暗い土地へ こういう無頓着者共が出かけてゆく、

でも〈一人〉 いたのだった

それを全くあちらこちら探し回っていた人が、  
そしてそれから〈太陽〉のように戻ってきて  
全ては終わっていると判ったのだった。

そして彼の死以来、我らにはすっかり見えるのだ

そなたの暗い道が全て、

そなたの隠遁所は貧弱で狭いので

彼の最初の表情を 忽ち擦り減らすことだろう。

霧がその日のために勝利を収めるだけ。

無害なスマイレが、生きている間<sup>(2)</sup>

軟膏とシロップ剤用にと

この地上でその持てる効能を差し出して

その後 穏やかに姿を消して

悲しみ嘆かず、愚痴をこぼさず、恐れもしないように

彼の僕<sup>しも</sup>たちは死ぬのだ、そして確かに

生き返る、

だから塵に君の眼を曇らせたりさせず

彼らを引き上げて 尚も生きたまま

君からは逃れ去るにしろ彼らの霊は巢箱に蓄えておこう。

[M・五三三—三四]

## 訳注

(1) Abel アダムとイヴの第二子、兄 Cain に殺された。「創世記」4・1～8。

(2) 「子供時代」「Child-hood」本誌一九九号、二〇ページの一四—一六行「しかし花々なら甦らせもすれば優雅にもするし／爽やかに生きていられる（人間とは何とまあ）／枯死しても、それなら医薬になる」、及び、G・ハーバートの「生命」「Life」六行詩三連、計十八行の作品、W・L・三四—四二の「三—一五行」「さらばだ 親愛なる花々よ、爽やかに自らの時間を汝らは費した／生きている間は香りが飾りに相応しく／死後は治癒に相応しく」と比較せよ「M・七五一」。

〈主〉が、羊飼いのアベルの献げ物の方を農夫のカインのそれより嘉したために、それに激怒したカインがアベル

を殺したというのだから、この兄弟殺しは〈主〉の言わば計らいということになる。『ヨブ記』の語るように、〈主〉は与え、〈主〉は奪うのである。

この詩は、カインの入っていった具体的な〈死〉を瞑想するのだが、それは、作中の「そなた」（カイン）と、「彼」（それをあちらこちら探し回った人）と、最後に突如現れる「君」とによって、そして勿論「我ら」も加わって作者の裡で展開される。ここにも「太陽」のイメージが出てきて「死」と関っている。バイブルには、様々な死が無数に跳梁するが、カインとアベルの兄弟殺しは、「死」の瞑想を誘発する最も刺戟に富む話柄の一つであろう。ヴォーンはやはり、この話題については、これだけではすまざなかった。(一)Bの九篇前に、アベルの血が、ずばり扱われている。

A B B C C …と二行ずつ押韻する四四行の詩で、四音節の四行以外は全て八音節の次の作品である。

## アベルの血 Abels Blood

悲しい深紅色の泉！<sup>ウエル</sup> そのぶつぶつ泡立つ眼は

真つ先に〈人殺し〉の叫びに逆らつた、<sup>(1)</sup>

その流れは今なお声を挙げ、今尚 不満を述べ立てる

血塗れカインのことに、<sup>まみ</sup>

そして今 夕べになると赤くなる

初めて流された朝のように。

もし誠実だつたらそなたは

(尤も誠実な声というのは低音にしかならないが)

今尚そなたの造物主の耳の中で鳴っているような

かん高い長い叫びを張り上げられるだろうか

如何なる雷電が糾弾してよからうか あゝの連中をと

自ら殺害した人々を数え上げられず

浅い洪水の中ではなく 深くて

広い血の海の中に浸す連中をと。

海は 音高き波のせいで眠れず<sup>(2)</sup>

〈深淵〉が深淵に呼びかけている、

その、多くの水の音のような<sup>(3)</sup>

切迫した音が叩くのは

上方で永遠に続く扉また扉、

そこでは祭壇の背後を人々の魂が動き回り

強い絶え間ない叫びを挙げては

至高の方に<sup>かた</sup> 〈どの位の問?〉と尋ねる。<sup>(4)</sup>

全能の〈審判者〉よ!

その公正な法に公正な人たちは不平は言わない、

その神聖適切な命令は 正に注ぎ込むのだ

慰めと喜びと希望を 毎時間、

その命令を守る人々に、お受け入れて下さい

彼の誓いを立てた心を、彼をそなたは守つたのだ

血塗れの人々から! だから認めて下さい、思うに

あの 宣誓の上での請願書は十分に報いるだろう

そなたの鮮やかな腕に、それこそ私の光であり

導き手だつたのだ 重苦しい死と闇の間中!

そうだ、あの洪水は<sup>(5)</sup>

あの 誇らし気に流されて嫌われた血は

言葉もなく穏やかで、〈幼児たち〉が眠っているようだ!

さもなくば それが凝視し許し泣いてくれたら

いいのに 血を流した人々のために! 泣き叫びなどは

低い大地から高い〈天国〉へ上がったにせよ、

何が(己の血が平和をもたらず彼の場合のように)

アベルの血が語るよりもっと増しな事柄を

語るのか<sup>(6)</sup> (叫びが上る時)! アベルが

尚も誠実だと聞き取られるように、叫びが  
声と意志の中を流れる彼の穏やかな血と和解する時  
誰が祈っただろうか 彼を殺した人々のために！

〔M・五二三—二四〕

訳注

- (1) 「創世記」4・10「お前の弟の血が土の中から私に叫んでいる」〔F・三二五〕。  
(2) 「詩篇」42・7「御身の注ぐ激流の騒音を耳にして 深淵は深淵に呼びかける」〔同〕。  
(3) 「ヨハネの黙示録」19・6「同」。「私はまた、大群衆の声のようなもの、多くの水の声や強烈な雷鳴の声のようなものが言うのを聞いた、ハレルヤ、我らが全能の神である主が 王になられた、と」。  
(4) 「ヨハネの黙示録」6・10〔F・三二六〕。「彼らは大声で叫んで言った、おお真実で聖なる〈主〉よ、いつまで裁きを行わず、地に住む者に我らの血の復讐をなさらないのですか。」。  
(5) [John] Cleveland [1613-58、熱心な王党派の詩人]、Epiaphon [Thomas Wentworth] Stratford [1593-1641、チャールズ一世の補佐役として反動政策を推進、長期議会から弾劾され、処刑]「ストラフォード追悼詩文」一二三—一四行

「ここに血が横たわる―そのままにしておこう／静かに言葉もなく決して叫ぶこともなく」を参照〔M・七五〇〕。  
(6) 「ヘブライ人への手紙」12・24「あなた方が近づいたのは…アベルの血よりも立派に語る撒き散らされた血です」〔M・七五二〕〔F・三二六〕。

この作品は、今度はカインからアベルに視点を移して、アベルの血の語るものの意味を読者に共に考察させようとするようだ。最終行で、「彼を殺した人々」とあるところからも、ここではアベルもカインも、もはや一個人ではなくなっている。

同題の作品に戻ることしよう。(二) A、この作品も既に(一) A 同様本小考(三)「本誌第二〇一号二五—二六ページ」で垣間みた。

死後の世界(その存在を信するか否かに拘らず)に想いを馳せるなら、〈死〉の次には〈最後の審判〉を瞑想するのは当然とも言えよう。己への最後の評価は誰にも気になるだろうから。確かに第一部では、(一) A の二篇後に(二) A が現われて、奔放な想像力が駆使されながら、〈最後の審判〉での「私が居るべき所」(最終行)を希求していた。

(二) B (二) A には無かつた定冠詞が付いていて、既に(二) A が存在することを暗示している) は第二部の終り近くに、今度は(一) B の三篇前に出てくる。A A B B C C …と押韻する四六行の詩で、四音節の四行以外は全て八音節の詩行。「アベルの血」と殆ど同じ詩型である。八音節行と六音節行が交互にA B A B と押韻する四行詩一一連から成る(二) A とは詩型もがらりと変る。最後の審判の日を「汝」と呼びかけながら、〈主〉に厳然たる審判を下して全てを一新してくれと希求する作品である。

### 最後の審判 The Day of Judgement [(二) B]

おお 生命いのちの、光の、愛の、日よ！  
天上から分け与えられた唯一の日！  
甚だ新鮮、甚だ明るく、甚だ華やかな一日なので  
その日は我らに 各々忘れていた墓を示して  
死者たちを 花々のように立ち上げらせ  
若々しく美しくして新しい空を見せてくれる。  
他の日々は全て 汝と較べたら  
光の弱い少数派にすぎない、

彼らは覆い布にすぎず 〈雲〉のように  
汝の光榮に満ちた夜明けの前に引かれた〈薄紗の布〉<sup>(1)</sup>  
おお 来たれ、立ち上げ、輝いて、留まるなかれ  
貴重な愛されし日よ！

畑は遙か以前から白くなっているの <sup>(2)</sup> 私  
自由を求めて真面目に呻きながら叫ぶと  
私の仲間たちもまた言う、〈来て下さい〉<sup>(3)</sup>！と。  
すると石<sup>(4)</sup>という石は言葉を持たないのに黙っていない。  
何時<sup>(1)</sup>我らは聞くことになるのか あの花と喜びの

光榮に満ちた声を？

その声が、我が〈主〉の死者たちの

各々秘密の寝台へ

正確な日をもたらし、塵「亡骸」に見せてくれるだろう  
不滅への道を。

何時あゝ最初の純白な〈巡礼者たち〉は立ち上がるのか？

その神聖な幸せな〈経歴〉は

(ずい分長らく眠っているから) 重んずる人々も  
いる、空しいペンの染みをつけてだが。

貴い〈主〉よ！ 急いで下さい、

罪は毎日ますます無駄をしているし

御身の宿敵は己が時の短いことを知ってますます怒り狂っている<sup>(5)</sup>。

私が（惜しみなくではあるが）呻き嘆くのは

御身の〈被造物〉の屈従と虐待だけではなくて

最高の罪と恥であるものも、

御身の名を汚す卑しい侮辱も、それに

不信心な才智と能力で〈聖書〉に

ごり押しされる改竄も、

あの純粹な詩行の名譽を汚す

悉く唾棄すべき意匠をも含めてなのだ。

おお〈神〉よ！ 慈悲は御身の中なれど

我らには見えます あの上なく偉大な特質が、

そして我らが罪を犯すのに最も必要なものが、

それでも御身の慈悲を以ってしても 単なる軽蔑しか

得られなくても 人間に言わせないで下さい

御身の腕は眠っているなどと、唯書いて下さい この日が

御身が審判を下す日だと、降りて来て、降りて来て！

何もかも新しくして下さい！ しかも終ることなく！

【M・五三〇—三二】

#### 訳注

(1) Cypres. 一六五五年版。これは Cypres. or Cypress (輕い透明な素材) の誤りだろう【F・三三四】。

(2) 「ヨハネによる福音書」4・35「…眼を上げて畑を見よ、既に白くなって刈り入れを待っている」【同右】。

(3) 「ヨハネの黙示録」22・17【F・三三五】。「〔靈〕と花嫁とが言う、『来て下さい』。これを聞く者も言うがよい、『来て下さい』と。渴いている者は来るがよい。命の水が

欲しい者は無料で飲むがよい。』

(4) stones. 「鳥」“The Bird”【M・四九七】の一四—一六行「活発な風や流れは走り且つ話す／貧しい石は言葉も舌も持たない／それでも石は深々と賞讃し続ける」、及び、

「石」“The Stone”【M・五一四—一六】、あるいは「復活前主日」“Palm-Sunday”【M・五〇一】の一—一二行

「木々、花々と香草、小鳥たち、獣どもと石また石／それらは人間の墮落以来、呻きながら思っている／『あの子羊に会えるものと…』を参照【M・七三五、七五一】」。

(5) more raging grows. 「ヨハネの黙示録」12・12「…悪魔は怒りに燃えてお前たちのところへ降りていった、僅かな時しか残されていないと知ったからだ」【F・三三五】。

(6) 「イザヤ書」51・9「目覚めよ、目覚めよ、力を纏え、主の御腕よ」【M・七五一】【F・三三五】

主の御腕よ」【M・七五一】【F・三三五】

(三)は、遠く間隔を開けてではあるが、A、B共に第一部の中に出現する。

### オリーブ山 <sup>(1)</sup> Mount of Olives <sup>(三A)</sup>

爽やかな、聖なる丘！ その美しい崖鼻に

我が〈救世主〉が座つておられた、私がさせられようか

言語に 陰や小森を<sup>(2)</sup>

愛して〈偶像視〉して、そなたを

無視するようになど。そのような場違いな才気は

奇想とでも何とでも好きなように呼べばいいが

頭脳の痙攣であり

単なる病気なのだ。

2

コッツウオールドとクーパーズは 共に出逢つてきた

学のある田舎の若者たちに、それでまだ〈飜している〉

彼らの歌う声が、才智<sup>(3)</sup>が、

しかしそなたは深々と無視されたまま眠っている

何者にも触れられずに、だから何の必要があろう

羊がそなたに愚かな〈歌〉を啼き聞かせることなど、

葦笛と羊飼いが一体となつて

奏でるのを 聞いているのに。

3

それでも〈詩人たち〉がそなたを十分心にかけていれば

分る筈だろう そなたが彼らの丘であり

泉でもあるのだと

彼らの〈主〉には そなたと共に何よりもまず成すべきこ

とがあつたのだ、

彼はかつて泣き、幾晩も夜どおしそなたへと歩いていった

それでそれ故（彼の苦悩は終つた）

栄光へと

伴われたのだ。

4

そこに在つては この広々とした球体は

全て彼<sup>か</sup>のかたの狭い足台にすぎず

我らが 探索不能だと

考えるものであり、今や瞬き一つで



あのかたが正に形作れるのだ、しかしこの大気の中に  
彼が留まって我らの〈邪悪〉と罪を

引き受け賜うた時、この〈丘〉は

その時、彼の〈椅子〉<sup>(4)</sup>になったのだ。

〔M・四一四—一五〕

## 訳注

- (1) エルサレム東方にある小さな山。イエス・キリストがしばしば祈りの場所とし、また、昇天した地とされる、最高点八四三m (Olivetともいう)「ルカによる福音書」22・29、「使徒行伝」1・12。

- (2) shade, or grove. おそらく初期の自作詩「ブライオリー森で」“Upon the Priorie Grove”〔M・一五—一六〕に言及しているものか〔M・七三二〕。「やあ 神聖な陰よ！ 涼しい葉陰の〈家〉よ！／我があらゆる誓いと健康の／慎ましい宝物保管係よ！その柔らかな胸を／我が愛する人が美しく歩むのを 私は初めて露にした」と始まる弱強四歩格の二行連句三六行の詩。

- (3) *Cotswold, and Coopers*. イングランドのグロスターシャー州中部にある連丘、牧羊地帯。前者は、アンナリア・デュブレンシヤ『コッツウールド丘陵でのロバート・ドウヴァー氏のオリンピックゲームを祝う例年の祭典に際して』

(ロンドン・一六三六) Annaia Dubrensia. *Upon the yearly celebration of Mr Robert Dovers Olympic Games upon Cotswold-Hills...*に収録されているドレイヤーン [Michael Drayton, 1563-1631]、シモンソン [Ben Jonson, 1573?-1637]、その他の詩で讃えられてきたし、後者は、デナム卿 [Sir John Denham, 1615-69] の詩「クーパーの丘」“Coopers' Hill” (一六四二) の中で讃美された〔F・一六二—一六三〕。しかしヴォーンはおそらくランドルフ [Thomas Randolph, 1605-35] 作の一篇の詩〔M・ロバート・ドウヴァー作コッツウールド丘陵で再開された気高い集りに関する牧歌〕“An Eclogue on the noble Assemblies revived on Cotswold Hills, by M. Robert Dover.”だけを念頭に置いているただろう〔M・七三二〕。

- (4) Chaire. ヴォーンによつての、ウェールズの身近な Black Mountains の最高峰 Cader Idris を指しているのだ〔H・一二三〕。

オリウヴァ山に「そなた」と呼びかけながら、イン格蘭ドの連丘に較べて無視されてはいても、〈主〉の、〈救世主〉の、椅子になったのだから、それで十分だろうと、作者の日頃馴染んでいるウェールズの風景と重ねて自ら安らいでいる趣きの作品。A A B B C D C D (第四連はC D D C

と締め括る) の型で押韻する八行詩四連で、各連共四音節三行と八音節(七音節も若干混入) 五行とから成る。

間に五五篇の作品を挟んで現れる(三)Bは、A A B B C C  
…と二行ずつ押韻する各行とも十音節の二六行の作品である。

### オリヴ山 Mount of Olives <sup>(1)</sup> [(三)B]

初めて私が真物の美しさと光のように活発な  
そなたの〈喜び〉と騒音の全くない静けさが私の魂に輝い  
て

いるのを見た時、私は力の隅々に到るまで感じたものだ  
〈夕べ〉の驟雨が穏やかな微風そよ風に煽られて〈運ぶ〉ような  
甘やかな豊かな空気と息遣いが

乾いたどこかの堤に華やかな花輪で飾られているのだと。  
〈香水〉と〈没薬〉それに芳香軟膏ばんかうが一度の激しい洪水で  
私の心から溢れ出て 私の血を活性化したのだ、

私の思索は〈慰安〉の中を泳ぎ 私の眼は

告白していた、世間は唯、絵を描いていただけだったと。

それでこれまで私は 安全ならざる〈進路〉を取って

年中 嵐の中を彷徨い

心は素より身体も佗しく素裸で

暴風雨や風のたびに吹き晒されていたのに<sup>(2)</sup>

今や私に注がれるこの視線にすっかり温められているので  
どの暴風雨の際中でも私はそなたの〈光線〉を感じ取る、  
それで私は知ったのだ ある美しい風景が

突然花々や樹木の中に 我が〈眼〉に立ち踞れるのだと、  
更に冬枯れの真只中にあっても

私の〈冷たい〉思いに春を生き生きと感じさせてくれるの  
だと。

こうしてあらゆる存在を育むそなたに養われて

私の萎びた葉は再び青々と繁茂し

私はそなたの翼の下に輝き護られるが そこで

私は恋い焦がれて歌おうと努めるのだ そなたの名を

そなたの栄光に満ちた名を！ それに全く相違ないので

以上がそなたへの〈賞讃〉であり、私の〈喜び〉ともなる

だろう。

[M・四七六]

#### 訳注

(1) G・ハーバートの「花」"The Flower"〔七行詩七連、計

四九行の作品、W i L・五六六—七〇」と関わりがある  
「M・七四四」。ハーバートの抒情詩の中でも最もよく知ら  
れて詩華集に採られている作品の一篇であり、言葉で表現  
された最良の抒情詩といわれる「W i L・五六六」この作  
品との比較考察は、稿を改めたい。

(2) And was blown through by ev'ry storm and wind, G・  
ハーバートの「苦痛」"Affliction (1)"[六行詩十一連、計  
六六行の作品、W i L・一六〇—一六八]の三六行目と殆ど  
全く同じ語句「M・七四四」。

「そなた」オリーブ山の、静かで活力を誘発する、美し  
い姿を想像で「見た」「私」は、その姿が思い浮かぶたび  
に、嵐や暴雨風に晒されても慰められるのだと表明する。  
オリーブ山讃歌によって心の平安を得ようとする作品で、  
(三)Bは、(三)Aの補遺というより、その延長、敷衍というべ  
き詩だろうか。作者は同じ第一部に、この同題の二篇を取  
録せずにはいらなかったのだ。それも最後に近くなって、  
(三)Bを。この作品に直統する次の一篇をここで見ておきた  
い。

## 人間 Man

ここ 下方の地上に居住する取るに足らない物共の  
不動の有様をあれこれ考えながら、とは言っても  
そこは小鳥が注意深い〈時計〉のように

騒音のない日と時間の〈交流〉とを分割する所だし、  
蜜蜂が家となる巢を夜中に手に入れ、花々が

早い時刻に、遅くなくても無論

〈太陽〉と共に起きて同じ木陰に憩う所だが、

## 2

私は(言ったものだ)我が〈神〉がこういう物共の  
不動ぶりを人間に与えて下さればいいのに! と願う、  
何しろ彼らは彼の神聖な約束にとにかく忠実だし

新たな仕事も彼らの平和を破ったりしないのだから。  
小鳥は種を蒔かず刈り入れもせず夕べに食し正餐を取る、

花々は着物も纏わず生きるが

ソロモンはそれほどさえ決して着飾らなかつた。<sup>(2)</sup>

## 3

人間は未だに戯れたり〈不安〉に苛まれたりし<sup>(3)</sup>

根なし草で一箇処に繋がれていることもなく  
いつも落ち着かず〈不規則に〉

この〈大地〉を徒歩で馬でと走り回る、  
自分には家庭があると知ってはいるがそれがどこかは殆ど

判らずに

言っている 甚だ遠いので

そこへの行き方をすっかり忘れてしまったのだと。

4

彼は扉とびらという扉を叩き、彷徨い、放浪する、  
いや、才智がない というよりは真暗闇の夜も  
各々の家を指し示す天然磁石を持たないのだ

誰かによって〈造物主〉に与えられた感覚を隠されて、  
人間は忪ゆななのであり、その巻きつける目標と

これらの機はたの通路へと

〈神〉は動きを命じ賜うたが、休息は定められなかった。<sup>(4)</sup>

[M・四七七]

訳注

(1) G・ハーバートの「星」"The Starre"四行詩八連計三二

行の作品、WIL・二六七—七〇」の三〇—三一行「あの  
輝きに充ちた巣へと向かう／蜜満載の蜜蜂のように家へ飛  
びゆく」を参照[M・七四四]。

(2) 「マタイによる福音書」6・26、27「F・二四五」。「空  
の鳥をよく見よ、種も蒔かず刈り入れもせず倉に納めもし  
ない」

「栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも  
着飾らなかった」

(3) ここから以下、G・ハーバートの「気まぐれ」"Giddy-  
nesse"後出「追求」の訳注(2)参照と比較せよ  
[M・七四四]。

(4) G・ハーバートの「滑車」"Pulley"の最終連「彼を休ま  
せておこう／しかし彼らは不満たらたら不安のままにし  
よう／彼は富んで退屈にさせてやろう そうすれば少なく  
とも／たとえ善によって導かれなくても退屈のせいで／彼  
は私の胸に飛び込んできそうだ」を参照[M・七四四]。

休息することなく動き回る運命にある〈人間〉を絶えず  
凝視しながら、その不安を解消する方法を追求しようとし  
ているのがヴォーン作品だと(また、先走ったが)看做  
したいが、それを端的に示す詩を、第一部の殆ど最後に据  
えたものである。A B A B C A Cの型で押韻する七行詩四

連から成り、四連共各行の音節数は順に 8 10 10 8 10 6 10 である。

(四)のA、Bに戻ることにしよう。

### 懇願 Begging [四A]

《慈悲》の《王》、《愛》の《王》、

御身の中で私は生きており、その中で私は動いています、

御身の始められたことを完成させて下さい、

夜がこの《太陽》を消さないようにして下さい、

確かに私には主な望みがあります！

御身を思い焦がれ、憧れることです

私の若さが 私の日々の花盛りが

私の《慰め》になり、御身への賞讃になりますように、

そうすればこれから後、私がああ汚れた罪深い

書物にざっと目を通して

見つけられるでしょう その中の御身の手が

私の恥と罪とを拭い取って下さるのが。

おお 御身の《業》<sup>アーク</sup>しかありません<sup>(1)</sup>

頑な心を変えるのは

それに勝利は御身のものですから

強固な足場は御身が持ちの筈、

《主》よ だからそれを保ったまま

私の気質や運命に委ねないで下さい、

私がそれを自分のものにはしようもないのですから、

おお我が《神》、それは御身のものにしておいて下さい！

「ユダの手紙」第二十四章、第二十五章<sup>(2)</sup>

私たちを罪に陥らせないように守り、欠点のない者として

溢れんばかりの喜びを抱いて 栄光に輝く御前に立たせ

て下さるかたに、私たちの《救い主》である唯一の賢明な

《神》に、栄光、威厳、《支配力》及び、権勢が 今も

これから先もいつまでも 在りますように、アーメン。

[M・四八〇]

### 訳注

(1) ここからの四行は、G・ハーバートの「自然」"Nature"、

「創造された世界、人間の本質、及び、神の本質、の三つ

の意味が内部で繋がった標題の、六行詩三連計一八行の作

品、W i l l ・一五四—五六」の四—六行「おお私の心を和

らげて下さい／御身の最高度の業なのです／強固な足場を御身に引きつけるのは」と比較せよ「M・七四五」。

(2) 「二箇処」の you を we に変えて、あとは欽定訳「F・二四九」。

第一部を締め括る作品である。一六五〇年刊行の『火花散る燧石』は、この作品で終っていた。「私」の「あの汚れた罪深い書物」であるこの詩集が〈主〉の〈業〉によって、頑な心に依る恥と罪の書物でないようにして下さいという〈懇願〉である。作者の謙虚ぶりを示すと同時に、実はこのようにして謙虚さを表明しなければならぬ程「私の氣質」の〈頑なさ〉を作者は自覚しているということでもある。

最初から二行目と最後から二行目の二行だけが八音節で、その他は全て七音節の詩行から成るAABBCC…と押韻する二〇行の作品。詩行の音節数も十分に考慮されている。全く同題の作品は、第二部の初めから三分の一ぐらいの所に出てくる。AABBの型で押韻する四行詩六連の詩で、全て八音節の詩行から成る。

### 懇願 Begging<sup>(1)</sup> 「四B」

ああ、行かないで下さい！御身は御存知です、私は死ぬのです！

私の〈春〉と〈秋〉は御身の書物の中です！  
そうでなくて、もし御身が行かれるなら拒まないで下さい  
私を遠くからでも一瞥して下さい！

私の罪のせいでもう長いこと御身には馴染みがありません  
私には甚だ見知らぬ方<sup>な</sup>でした

この変化以来 朝の礼拝集会はないし  
私が御身と夕べの散索をすることもありません。

何故私の〈神〉は これほど鈍く冷淡なのですか  
私が一番、最も、病んで悲しんでいる時に？

昔のあの祝福された日々なら巧くゆくのに  
御身はあの嘆き悲しむ〈若者<sup>(3)</sup>〉に耳を傾けられたのだ！

おお御身は私がしたようにはなさいますな、  
〈恋しい〉の心を軽蔑なさいませんように！

たとえ挑みかかる雲があるにしろ

御身の〈太陽〉はどの部分も輝くに違いありません。

私は駄目になりましたが、おお御身は損なわれませんように！

御身自らの貴重な贈物と前兆を憎まないで下さい！

哀れな小鳥たちは最も巧みに歌い、この上なく美しい姿を見せます、

彼らの巣が落ちて壊れる時に。

親愛なる〈主〉よ！取り戻して下さい 御身のかつての平和を

気力を生み出す御身の友情を、人間の明るい繁栄を！

そしてたとえ御身が私を 病から解き放って

下さらないにしろ、私の精神は健康に戻して下さい！

〔M・五〇〇—一〕

#### 訳注

(1) この作品は、既にヴォーンの詩集『孤独な花』*Flowers Solitaires* (1654) に「生と死を処理する唯一の方、唯一真の

栄光に満ちた神」"To the only true and glorious God,

the Sole disposer of life and Death"の標題で発表す

〔M・二一八〕のもの〔M・七四八〕〔F・二九三〕。

(2) do, [F・二九三] は Do.

(3) Ismael (イシュマエル)。奇跡的に渴死から救出された  
〔創世記〕21・9～21〔M・七四八〕〔F・二九三〕。

訳注に示したように、別題の既発表作品を改題して、第二部に組み込んだものである。句読点や古い綴り、字体はかなり変えてあるが、語の変更は一か所だけ、第三連の一行目「鈍く」"slow"は、初出作品では「厳しく」"hard"であった。〈神〉への非難調を和らげたか。

ヴォーンは一六五三年頃、死にそうなほどの重病に罹って、それがおそらく彼の篤信を深めただろう〔H・一〇七〕ということなので、その時の作品であろう。死に瀕して一旦は遠退いた神への想いを、この〈懇願〉によって再び一段と強く惹き寄せられたというなら、健康も回復できたお陰で第二部収録の作品群も書けたのだ。その中に(四)Bはどうしても含めずにはおけなかった。

(五)のA、Bは共に第二部に、間に一篇挟むだけで近接さ

せて、(四)Bの間近に収録された。

### イエス泣き賜う Jesus weeping [五A]

「ルカによる福音書」第十九章第四十一節<sup>(1)</sup>

聖なる 不幸な〈都市〉？ 親しく愛されながら  
尚も不親切な！ 業は今日何物をも感動させないのだ！

業はやはり無意味なのか？ おお汝は眠れないのか！

〈神〉御自ら汝のために泣き賜うのに、

御し難いユダヤ人よ！ 汝らの父祖は

子牛には仕えたがアブラハムの種子は育めなかった、<sup>(2)</sup>

その〈赤子〉への〈讚美〉<sup>ホザナ</sup>は叫ばなかったとしても

石は話したのだった、汝らの異としたことを。<sup>(3)</sup>

貴いイエス様、泣き続けて！ 降り注いで下さい この  
最後の 魂を活気づける雨を、この生ける水を

彼らの死せる心、心に、だが（おお我が恐怖よ！）

彼らは涙を蔑む血を飲むことだろう。

我が尊くも輝かしい〈主〉！我が〈夜明けの星〉よ！

この生ける露を注いで下さい ここから遙か遠くで  
それを待ち望んでいる原野に！ そこに注いで下さい  
飢えた大地が一掬の涙を求めて呻いている所に！

この土地は御身の心から祝福されて抽出されたもので養分  
を得ているが

何も生み出さないだろう 御身の顔を傷つける茨の他は。

〔M・五〇二—三〕

#### 訳注

(1) 「近づいてその都市が見えるとイエスはその都のために  
泣いて」言った「F・二九六」。「もしお前「エルサレム」  
がお前だけでも、今のこの日に自らが平和に到るための事  
柄を弁えていたなら！しかし今はお前の眼からそれが隠さ  
れている」。自らの崩壊に気付けないうるエルサレムの  
ためにイエスは泣くのである。

(2) 「出エジプト記」32・4、9「F・二九六」。モーセが山  
に登っている間、イスラエルの民は子牛の鑄像を造ってそ  
れを崇めた。

(3) 「ルカによる福音書」19・40「もしこの人達が沈黙した  
りすれば、石が直ちに話し出すだろう」〔F・二九六〕。



## イエス泣き賜う Jesus weeping 〔五〕B

「ヨハネによる福音書」第十一章第三十五節<sup>(1)</sup>

我が親愛なる〈全能の主〉よ！何故御身は泣き賜うのか？

何故御身は再び呻きに呻き

それほど深く

繰り返し溜息をついて御身の親切な心を痛めるのか？

我らのためにこうして〈嘆き〉賜うのと同じ

神聖な息遣いが

人間の死んで散らばった骨を

合体させて 忽ち 死者となった全てを蘇らせ賜うのに。

おお神聖な呻き声！ 〈鳩〉の呻き声<sup>(2)</sup>！

おお癒しの涙！ 愛の涙よ！

死者の露！ それが塵を動かし

跳ねさせるのだ、それほど惨めなまで嘆き悲しむなんて！

苦痛を和らげられるというのに。

御身の溜息は溢れる涙を抑制し

それ以上掻き立てないようにする筈ではなかったか？

二つの難儀が一時に一人を支配することは

ないだろうから そうみえるものはあっても。

あの突風が ここで我らの頭上を彷徨っているが

もし驟雨がその時降ってくれば驟雨を鎮めることだろう

この風の強い世界に留まっているあの哀れな

〈巡礼者たち〉がしばしば試みてきたように。

親愛なる〈主〉よ！ 御身はそれ全身悲しみと愛だが

そのうちのいずれが最たるものか誰にも証明できない。

御身は悲嘆に暮れるが、人間が自らを台無しにするので

彼を愛し賜うのだ 唯、彼は御身の苦痛の種<sup>たね</sup>なのだ。

生命<sup>いのち</sup>を全うするのに欠かせないのは

あの広範な全能の尺度ではなかった、

（御身の心という貴重な宝で獲得されはしたが）

御身の胸中の

悲嘆と憐愍とのこの格闘が

平和と権力が安らいでいる王座を生み育てた、

だが御身の眼を（無断で）和らげ 御身の心を  
膨らませたのは 御身の愛ではなかった、

というのも 死は御身がなさったことをそのように  
無かったことには出来ないのだから（尤も人間も

台無しにする手助けをしたりするが）それだけに御身は  
以前の状態より遙かに増しに回復されるわけではない、  
とは言え、御身は余りにも憐れみの心が深いので

（御身の心を溢れ出る憐れみといったら！）

人間のあらゆる傷害を（癒す）のは

御身の輝かしい腕にとつては何ほどのこともないものの  
それでも御身はあれほど恣に（癒す）ことは出来なくて  
彼のために気の毒がつて下さるに相違ない。

だから 喜びよさらば！だ 生きている間

ここでの私の仕事は悲嘆に暮れることになる筈だから。

悲嘆に、騒音はないものの浮かれ騒ぎと活気のせいで  
あらゆる喜びよりも光輝くほどの。

悲嘆に、その 音一つ立てない露が 呪われた種子が  
時々支配した所に（百合）と（ミルラノキ）を

生み育てることになるほどの。とても明るい悲嘆なので  
闇の（土地）に光をもたらすことになるだろう

そのお陰で余りにも多くの人々が悲し気にうろつく間も  
私は（白鳥のように）歌いながら家路につけるだろう。

「詩篇」第七十三章第二十五章<sup>(3)</sup>

御身以外に天で 私に誰がいてくれるでしょうか？地上で  
は御身の他に 私が望む人は誰もいないのだから。

「M・五〇三―五」

#### 訳注

(1) 「イエスは泣き賜うた」。これはラザロの死を知った時の  
ことで、その時イエスも「心に呻き声を発せられた」（同  
第三十三、三十八節）「F・二九八」。

(2) 「ローマ人への手紙」8・26「M・七四九」。「…（霊）  
自らが言葉には表せない呻き声を出して執り成して下さる  
から」。

(3) 欽定訳版「F・二九九」。

(五) Aは、自らの崩壊に気付けないでいる都市エルサレム  
に涙を流すイエスに思いを馳せながら、「御身の顔を傷つ  
ける茨しか生み出せない」と思う己が心を、イエスの涙で  
浄化したいと「私」は希う。十音節二行と八音節六行から

成る八行詩二連を、十音節の二行で締め括る形で、A A B B C C…二行ずつ押韻する。第一連の冒頭行「Blessed, unhappy City? dearly lov'd」は、聖別されて神聖な（だから幸福な筈なのに）不幸な都市と言わなければならぬのか、と撞着語法による疑問の提示から始めて巧妙だ。

(五) Bは、ラザロの死を知った時のイエスの悲しみに思いを到すことから瞑想が始まる。〈主〉は、苦痛の種子である人間が己自身を台無しにするので、そういう哀れな人間を悲しみながら愛するのだ、と「私」は〈主〉の悲しみと愛に思いを進め、地上で生きる自分には、悲嘆、それも、あらゆる喜びよりも光輝くほどの「明るい悲嘆」「A grief so bright」に暮れるのが仕事だと思い定める。「明るい悲嘆」なる撞着語が暗示するように、悲嘆を癒そうとするのではなく、それを生きたる活力にしようと、自らを鼓舞するのである。A A B B C C…と韻を踏む二行連句の連と、A B A Bと交互に押韻する連が混入する、十音節の三行、八音節の四六行、四音節の四行から成る五三行の力作である。(五)はA、Bによって、異なった状況におけるイエスの悲泣が扱われたものである。

以上、同題の作品五組はいずれも、それぞれ詩型を変え

ながら、同じ主題とみえるものを決して同じでなく扱い、別様に展開していた。尚、同題ではないが、「埋葬（式）」が標題に含まれている作品が、第一部に二篇、第二部に一篇収録されている。まず第一部のものを出現順に見てみよう。

### 埋葬 Buriall

おおそなた！ 死者たちの最初の稔り

にして 彼らの暗い寢床は

私があの深くて人事不省の

眠りに投げ込まれた時

我が罪の報酬だ<sup>(1)</sup>った、

おおその時、

そなた あらゆる人々の偉大なる〈守護者〉よ！

あのぐらついた空っぱの

家を見守りたまえ、

時々私が住んだ家だったのだ。

それは（実のところ！）損なわれた平穩で

そなたの〈眼〉には値いしない、

それに 吹き荒ぶ風と雨のための

余地しか殆どなく、座席と

内部の〈小部屋〉は汚れたまま、

それなのにそなたは

自らの〈愛〉に導かれてこんなに低く屈むことだろうし

この〈小屋〉の中に

すっかり汚れ、染みだらけになって

僕と共に〈宿泊〉したのだった。

3

それで私は時々気付いているが 何も

そなたを私から追い払えるものはない、

そなたは変ることなく忠実で公正なのだ

生きていても〈塵〉となつても

尤もその時（こうして粉々に砕けて）私は彷徨うが

突風の中を

あるいは〈蒸気〉<sup>(4)</sup>の中を、茫漠たる荒廢地を

全ての〈眼〉の届かぬ果てだが

だが そなたを愛する人はその〈変化〉を

見つけ出し、そなたの〈天性〉<sup>(5)</sup>を知っているのだ。

4

世間はそなたの箱、ではどのようにに（そこに投げ込まれ）

私は迷うことになるのか？

だが遅らせることが全てだ、〈時〉は今や

年老いて緩やかになり

その翼は鈍くなり 病気がち、

それでも彼は

そなたの僕で そなたに仕えている

だから総量は減らそう

〈主〉よ急ぎたまえ、〈主〉よ来ませ、

おcomeませ 〈主〉〈イエス〉よ、すみやかに！

「ローマ人への手紙」第八章第二十三節<sup>(6)</sup>

そして被造物のみならず我々自身もまた、靈の最初の稔  
りを戴いているのだから、我々自身でさえ我々の内部で呻  
きながら、神の子として受け入れられることを、つまり、  
我々のからだが贖われることを、待ち望んでいるのです。

〔M・四二七—二八〕

訳注

- (1) The wages of my sinne,「ローマ人への手紙」6・23「罪の報酬は死です、だが神の賜物は我らが主イエス・キリストによる永遠の生命なのです」とある。

- (2) crummi=d=crumbled, reduced to particles or dust [F・一八一]。

- (3) I stray/in blasts, ハッチンソンは、G・ハーバートの「最後の審判の日」“Dooms-day”〔六行詩五連計三〇行の作品、W・L・六四九—五三〕の二二行目「あるものは風に己がからだを晒す」と比較している〔M・七三四〕。

ウィルコックスは、ハーバートのこの詩句の辺りは、埃を浴びた羊の群「人々」が風（嵐を引き起す）と空気のガス（病気をもたらす）に晒されるという二つの例を示しているところで、ヴォーンはその組み合わせを反響させているとしてこの箇所を挙げる〔W・L・六五二〕。

- (4) Exhalations, ヴォーンの英訳したヘンリー・ノリウス著『秘伝医師——健康を保持し回復するための正統法』*Hermetical Physick: or, The right way to preserve, and to restore Health By That famous and faithful Chymist, Henry Norlius*, (一六五五)では、病気の原因について論じている中で、乾いたExhalationは‘Fume(ガス)」、湿ったそれはVa-pour（蒸気）と呼ばれるとある〔M・五六一〕——〔M・

七三四〕。

空中に放散される気体で、ヴォーンに類出する。文脈に  
応じて「水」蒸気」と拙訳している。本誌前号〔二〇三  
号〕一一ページ訳注（1）参照。

- (5) 欽定訳版〔F・一八二〕。

四連共、各詩行の音節数は一行目から順に8 4 8 4 6 2  
8 4 4 6で、A A B B C D D E E Cの型で押韻する十行詩で、  
整然たる詩型の全四〇行の作品である。

或る幼児の埋葬<sup>(1)</sup> The Burial Of an Infant

聖なる〈幼児〉〈蒼〉よ、その〈花盛り〉の生命<sup>いのち</sup>は  
唯、辺りを見回すだけで倒れてしまった、  
無害な涙ながらの奮闘のうちに疲れ切つて  
あらゆるものの乳であり 糧であったのに、

愛<sup>いと</sup>しいままに汝は 息を引き取つた、汝の魂は  
新たな血縁に汚されることもなく家族から飛び去つた  
汚れることがどういふことか知らないうちに

死がこの世と罪から汝を乳離れさせたのだから。

静かに安らぐがよい 汝のあらゆる〈乙女〉〈微粒子<sup>(2)</sup>〉！

汝の若々しい息の芳しさにひたひたと洗われながら

汝の〈救い主〉が〈来ます〉まで その微粒子を  
衣服で飾り、死の産着を脱がせるのだと思つて。

〔M・四五〇〕

#### 訳注

(1) おそらくヴォーン自身の子供の一人。ここでの幼児観について、「後退」『The Retreat』[本誌一九九号一七一—九]及び、「子供時代」『Child-hood』[同一九一二]と比較せよ〔F・二〇九〕。

(2) Crum. 何かの小さな粒子、埃のような粒。OEDがこの意味での例として、この箇所を挙げている〔同〕。この幼児は女。

各行とも全て八音節で、A B A Bの型で押韻する四行詩三連のこの短詩を評して、ベセルは言う。最終行の奇想で生と死を合体させて、死は新たな生命・生活への誕生であることを示す最終連には、ジョン・ダン譲りの才気が見ら

れ、この詩は「伝統と個人の才能」の見事な組み合わせだと (BS・一三九)。

第二部には次の一篇が収録されている。

#### 埋葬式 The Obsequies

私のための死出だったので 御身が切望されたのは

ありふれた報いにすぎなかった

幾らかの真物の涙と 私自身の誤れる道の

ために流された涙だけだった

御身の悲しい死は尚も安易に

はつきり思い出されてはいたが、

忘却は生命そのものの呼吸

さえ 殺しそうだったから、

私はこの上なく愚かで不親切だったのだ

私自身の感じだが、

もし私が幾らかでも御身の力強い愛ではなくて

私自身の弁護を心にかけているのだとしたら。

それ故、あの ここでは人々が楽しい御馳走と呼んでいる

歓喜と欲望を

私はしっかりと縛り結んで閉ざしておこう

喪のための粗製麻布着用に、すっかり屈辱に苛まれながら。

送葬者もあの人たちしか身に纏えないのだ

豪華な寡婦の喪服や経帷布は、

御身のお墓でさえ〈白衣〉を着ていた人はいたから<sup>(1)</sup>

そして〈喜び〉が光同様、雲の中でしばしば輝くのだ

しかし御身は人間の生活の全てを支え賜うお方で

私をやはり誘い求められるので

私は欲しいのだ 陽気になるための技能が、

それを身につける時間が。

おまけに、あの 私を華やかにしようと時々<sup>(2)</sup>

落とされた〈ハンカチ〉が

私には見つからず、見えるのはかつて私のために

御身の頭が御身の墓の中のどこにあったかだけ。

御身の御墓！そこへこそ私の諸々の想いを向かわせ

よう〈蜜蜂〉が〈巣箱〉の中へと殺到するように

人殺しの酷い世間の紛いものの愛から御身の

死が私の魂を護って生かし続けて下さるようにと。

〔M・五三六―三七〕

## 訳注

(1) イエスの墓の二人の天使たち。「ヨハネによる福音書」

20・12「F・三四二」。「イエスの遺体の置かれていた所に、白衣の二人の天使が見えた、一人は頭の方に、もう一人は足の方に。」

(2) グロサール「ヴォーンの全著作集の編者 A. B. Grosart」が示唆している、ある婦人が護衛の騎士に授けたハンカチだと「F・三四二」／G・ハーバートの「夜明け」"The Dawning"「八行詩二連、計十六行の詩、W i l・三九八―四〇〇」の一五―一六行「キリストは御自らの墓衣を残し賜うた、我らが、哀しみが／涙を血を引き出しても、ハンカチを必要としないように」との比較を示唆「M・七五一」。

これは、イエス・キリストの死とその埋葬を瞑想する作品で、第一部の二篇に使われたアングロサクソン語系の“burial”に対して、ラテン語由来の“obsequies”が題に使用される。A B A B 型の交互韻と、A B A B 型の二行連句が混合された詩型で、十音節の四行、八音節の一八行、六音節一行、四音節九行から成る三二行の詩である。

言うまでもなく〈死〉は〈生〉と密接に繋がっており、前者への想いは後者を思うことである。既に見てきたようにヴォーンにとつての重要な主題は〈再生〉だが、〈再生〉とは〈死〉からの甦りであり、それには〈埋葬〉への想いが必須なのである。

\*

『火花散る燧石』の中の同題の作品群は、角度を変え視点をずらしながら対象を追求するヴォーンの姿勢を端的に示したものとみることが出来るだろう。今、追求と述べたが、この詩集には、ずばりその標題の作品も存在する。既に一瞥した、〈神〉を捜し求める主題の「探索」〔本誌第二〇一号二七—三〇〕と類似の標題の詩である。先刻取り上げただけの「人間」との関りもあるので、最後にそれを見よう。

## 追求 The Pursuite <sup>(1)</sup>

〈主〉よ！何と忙しく落ちつきのないものに

御身は人間を創られたのか？ <sup>(2)</sup>

一日一日、毎時間、彼は翼に乗って

僅かな間も休まない、

それで〈太陽〉と光を失ってしまう

不意打ちの雲によつて、

彼は夜中に〈交流〉を保つのだ

姿を変えた空気と、

御身はこの活発な塵に与えられたのだ

疲れを知らぬ状態を、

喪われた〈息子〉は殻は残さなかったし

家庭も望まなかった、 <sup>(3)</sup>

それは御身の秘密だったし、それが

御身の慈悲でもある、

というのも全てが至福に至れないなら

その時には、こうしなければならぬのだから。

ああ！〈主〉よ！ 何という〈買い物〉になるのだろう

我らを病気にするとは、音も御身を惹こうとしないのだ。

[M・四一四]

## 訳注

(1) ヴォーンの「人間」『Man』『M・四七七』、及び、G・ハーバートの「滑車」『The Pulley』〔神が初めて人間を創



られた時」で始まる五行詩四連計二〇行の作品、W i l・五四八―五〇」と比較せよ「M・七三二」。

- (2) G・ハーバートの「気まぐれ」“Giddiness”[四行詩七連計二八行の作品、W i l・四四五―四七]の一二行「お何たるものか 人間とは！どれほど遠く離れていることか／力から、安定した平和と安らぎから！」を参照[同]。この詩行は、「詩篇」8・4「人間とは何だろう 御身が心にかけて下さるとは、また、人間の息子とは 御身が訪れて下さるとは」、及び、「何という作品だろうか 人間とは」(Shakespeare, *Hamlet*, II. ii. 303-4)の皮肉な反響だろう[W i l・四四六]。

- (3) 「ルカによる福音書」15・16―19。放蕩息子の物語を見よ[F・一六二]。

八音節の行と四音節の行とが交互に続き、最後に十音節の二行で締め括る一八行の詩でA B A B C D C D…と交互に押韻し二行連句で締め括る作品である。最終行の「音」“sound”[形容詞だと「健康な」の意]とは人間の〈主〉への祈り、訴えかけを指すか。その前の「病氣(の)」“sick”この縁語も暗示しよう。〈神〉を「探索」するとは、その被造物である〈人間〉を「追求」することになるのだろ

う。今回は、「探索」と「追求」のように、類似の標題を持つ作品群を検討したい。

\*参考文献 本稿で直接言及したものについては文中では各文献の上に記した略記号で示す。数字はそのページ表示。

- [A] Austin, Frances. *The Language of the Metaphysical Poets*. London : The Macmillan Press, 1992.
- [B] Beer, Patricia. *An Introduction to the Metaphysical Poets*. London : The Macmillan Press, 1972.
- [B u] Blunden, Edmund. *On the Poems of Henry Vaughan : Characteristics and Intimations*. London : Cobden Sanderson, 1927 ; rpt. New York, 1969.
- [B e i] Blunden, Edmund. *Lectures in English Literature*. Tokyo : Kodokan, 1952, 2nd ed.
- [B e ii] Blunden, Edmund. *Nature in English Literature*. London : The Hogarth Press, 1949. 1st ed. 1929.
- [B H] Bloom, Harold, ed. *John Donne and the Seventeenth-Century Metaphysical Poets*. New York, New Haven, Philadelphia : Chelsea House Publishers, 1986.

- [a • d.] Bradbury, Malcolm and David Palmer, eds. *Metaphysical Poetry* (Stratford-upon-Avon Studies 11) London : Edward Arnold, 1970.
- [æ o] Bethell, S. L. *The Cultural Revolution of the Seventeenth Century*. London : Dennis Dobson, 1951.
- [c] Chambers, E. K., ed. *The Poems of Henry Vaughan, Silurist*. Introduction by H. C. Beeching. 2vols. London and New York : Charles Scribner's & Sons, 1896.
- [d] Durr, R. A. *On the Mystical Poetry of Henry Vaughan*. Cambridge, Massachusetts : Harvard University Press, 1962.
- [w] Empson, William. *Seven Types of Ambiguity*. London : Chatto and Windus, 1930 ; Penguin Books, 1961. 174-75.
- [岩崎宗治訳『曖昧の七つの型』(研究社 一九七四) 三十一―三十五]°
- [u] Fogle, French, ed. *The Complete Poetry of Henry Vaughan*. New York : Doubleday. 1964 ; New York University Press, 1965.
- [u x] Friedenreich, Kenneth. *Henry Vaughan*. Boston : Twayne Publishers, 1978.
- [g] Gardner, Helen, ed. *The Metaphysical Poets*. London : Oxford University Press, 1961.
- [g i] *Seventeenth Century Studies presented to Sir Herbert Grierson*. London : Oxford University Press, 1938 ; rpt. New York : Octagon Books, INC., 1967.
- [g d] Garner, Ross. *Henry Vaughan : Experience and the Tradition*. Chicago : University of Chicago Press, 1959.
- [h] Hutchinson, F. E. *Henry Vaughan : A Life and Interpretation*. Oxford : Clarendon Press, 1947.
- [h w] Holmes, Elizabeth. *Aspects of Elizabethan Imagery*. Oxford : Basil Blackwell, 1929.
- [h w -] Holmes, Elizabeth. *Henry Vaughan and the Hermetic Philosophy*. Oxford ; 1932 ; rpt. New York : Haskell House, 1966.
- [h g] Hammond, Gerald, ed. *The Metaphysical Poets : A Casebook*. London and Basingstoke : The Macmillan Press, 1974.
- [h • o] Healy, Thomas and Jonathan Sawday, eds. *Literature and the English Civil War*. Cambridge : Cambridge University Press, 1990.

- [J] Leishman, J.B. *The Metaphysical Poets: Donne, Herbert, Vaughan, Traherne*. Oxford: Clarendon Press, 1934.
- [JH] Lyte, H. F., ed. *The Sacred Poems And Private Ejaculations of Henry Vaughan*. Boston: Little, Brown and Company, 1865.
- [M] Martin, L. C., ed. *The Works of Henry Vaughan*. Oxford: Clarendon Press, 2nd ed. 1957.
- [M-] Martin, L. C., ed. *Henry Vaughan: Poetry and Selected Prose*. London: Oxford University Press, 1963.
- [MW] Miner, Earl. *The Metaphysical Mode from Donne to Cowley*. Princeton: Princeton University Press, 1969.
- [M-] Martz, Louis L. *The Paradise Within: Studies in Vaughan, Traherne, and Milton*. New Haven and London: Yale University Press, 1964.
- [M-] Martz, Louis L. *The Poem of Mind: Essays on Poetry/English and American*. New York: Oxford University Press, 1966.
- [M=] Martz, Louis L. *The Poetry of Meditation: A Study in English Religious Literature of the Seventeenth Century*. New Haven and London: Yale University Press, 1962.
- 1st ed. 1954.
- [P] Petter, E. C. *Of Paradise and Light: A Study of Vaughan's "Silex Scintillans"*. Cambridge: Cambridge University Press, 1960.
- [R] Richmond, H. M. *Renaissance Landscapes: English Lyrics in a European Tradition*. The Hague: Mouton, 1973.
- [S] Simmonds, James D. *Masques of God: Form and Theme in the Poetry of Henry Vaughan*. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1972.
- [SC] Schuchard, Ronald, ed. *The Varieties of Metaphysical Poetry By T. S. Eliot/The Clark Lectures at Trinity College, Cambridge, 1926 and/The Turnbull Lectures at The Hopkins University, 1933*. London: Faber and Faber, 1993. [ロナルド・シユチャード編『ト・S・エリオットのクレーク講演』村田俊一訳(松伯社 110001)〕。
- [S >] Spencer, Theodore, and Mark Van Doren. *Studies in Metaphysical Poetry: Two Essays and A Bibliography*. Port Washington, N. Y.: Kennikat Press, 1939.
- [T] Tive, Rosemond. *Elizabethan and Metaphysical Im-*

agency. The University of Chicago Press : 1947 ; rpt. Phoenix Books, 1961.

[W] Whittier, John Greenleaf, *Anti-Slavery Poems : Songs of Labor and Reform*. London : Macmillan and Co., 1889.

[WG] Williamson, George. *The Donne Tradition : A Study in English Poetry from Donne to the Death of Cowley*. New York : The Noonday Press Inc., 1958. 1st ed. 1930.

[MH] White, Helen C. *The Metaphysical Poets : A Study in Religious Experience*. New York, 1936 ; rpt. New York : Collier Books, 1966.

[M-J] Wilcox, Helen, ed. *The English Poems of George Herbert*. Cambridge : Cambridge University Press, 2007.

〔川崎1〕「ヘンリー・ヴォーンの自然神秘主義」（川崎寿彦『薔薇をして語らしめよ―空間表象の文学』名古屋大学出版会、一九九一。一七四―九八。）

〔川崎2〕川崎寿彦『鏡のマニエリスム―ルネッサンス想像力の側面』研究社、一九七八。一五二―五八。

拙訳での（）付きとゴチック体は、原詩ではそれぞれ大文字で

始められる語句とイタリック体部分である。

\* 本稿は二〇〇八年度成城大学文学部特別研究助成による成果の一部である。